

発掘のような作業現場

株式会社上組港運事業本部
ポートアイランド第2営業所
木良七津雄

1月17日午前5時40分、休み明けは前日迄に仕事が溜まっているため、いつもより早く自宅を出た。前々日のラグビー日本選手権の余韻を楽しみながら車を運転していたくらいで、その他はいつもとまったく変わったところはなかった。東を向いて車を走らせ朝焼けの空を見ながらいつもと違う毒々しい赤い空だと感じていたのを覚えている。

5分位も走っただろうか、強い横風に会い車が横転しそうになった。その時、前方の電柱が激しく揺れ、電線がパンパンと張っては緩み、張っては緩みしている。左右の家屋の屋根瓦が落ちてきた。そして、自分の運転している車が横転しそうになっているのが、風ではなく地震によるのであることが頭に入った。できるだけ冷静になるよう自分に言い聞かせ近くの駅前の広場に車を止め、公衆電話に入り自宅に電話をするが通じない。近くの藤江駅近くの実家が古く気になったので、そこまで車で行き玄関を叩いたところ中から人の気配がしたので少しほっとした。中に入りローソクで明かりをつけた部屋中を見て廻り被害のほどを確認し、母親に火の元と余震に注意するよう言い置き自宅へ戻った。自宅では明石西部であったことが幸いし、玄関で下駄箱が倒れ、その他ガラス類が壊れたほどであり、後で知った他の地域に比べれば運の良い方であった。家人と簡単な片付けをしテレビでニュースを見たが、その時点では後の知るところとなるような状態になるとは微塵も思わなかった。

1月19日、震災後初めて出社した私が目にした光景は構内も事務所も液状化現象による泥で埋まり近代的な設備で整然とした都市とは程遠い一種異様なものでした。

屋外貯蔵所に保管しておりました貨物は全て倒れ泥の中に埋まり、北側、東側の岸壁は完全に壊滅して各倉庫はいたる所に亀裂が入り傾いておりました。各屋内貯蔵所は周囲の液状化現象による泥の為シャッターを開けることができず、開けることができない故に内部状態を想像すると悪い方へ想像が増幅し、頭の中が黒いものに覆われるようでした。

その後、屋内貯蔵所のシャッターを開けた時は、アルミの缶ジュースを握り潰したようなドラムで埋め尽くされており、想像通りの絵がそこにありました。正直言ってシャッターを開けるまでは、もしかしたら被害は小さいのではないかと一縷の望みを持っていただけに期待を裏切られたような現実を突き付けられました。それからは連日危険品を含む全ての貨物を一つ一つ取り出し仕分けしていくという、まるで考古学上の発掘のような作業を数カ月も続けました。

現在も、まだ、ポートアイランド内は交通状況も悪く道路も復旧されておられません。また、事務所、

倉庫、岸壁も仮修理をただけですが、徐々にではありますが営業もしております。震災直後、全従業員で泥と埃だらけで復興していたことが、もう数年も前のような気がしてなりません。現在の事を思うと砂の一粒づつを拾い集めるような作業でもここまでできるのかと感じます。

完全復興まではさまざまな問題があり、時間が掛かり、今の段階で震災を振り返る事は時期尚早とは思いますが、私にとって今回の阪神大震災は都市のみならず社会構造のむろさを実感させられた出来事でした。

震災当時、液状化現象により泥水で埋めつくされていた構内

